

## す じ た お す

(前略)

「ぼくはまじめにしっかりやります。カブ隊のさだめを守ります。」

さだめがカブ隊は5つあるのですね。これは隊のさだめです。カブスカウトのさだめではなくて、カブ隊のさだめです。

さだめは、カブスカウトのやくそくとは違うということを知ってください。カブスカウトのやくそくと、カブ隊のさだめ。片一方はスカウト、片一方はカブ隊です。

すなおであります＝上(の人に対してすなおである)。

自分のことは自分でします＝真ん中。(※注・コメントあり！)

たがいに助け合います＝横。

おさないものをいたわります＝下。

そして、すすんでよいことをします＝全体。

この小さなさだめの中で、大きなことを伝えています。

この5つが円の中に入るのでですね。小さな社会です。カブ隊のサークルです。そしてまだ自立していない子どもたちに、手を差し伸べるのです。

ボーイスカウト年代以上は教育と言い、ビーバーとカブは訓育と言います。カブとビーバーの指導者はぜひ、訓育という意味をもう一回思い起こしてください。単なる教育ではないということをぜひ知っていただきたいと思います。訓育と書いてあるのに、教育と直したりする人がいますが、それは違います。

ベーデン・パウエルはウルフ・カブでスカウトではない。一人前にならない子どもたちに提供するものと、一人前になったスカウトに提供するものは違うということを明確にしていきたいと思います。

隊長あるいはリーダーの任務の基本は、一人一人のスカウトの成長を図るということです。班制度をうまく運用するとか、進歩制度をうまくできるということではないのです。

そのことをぜひ知ってほしいです。一人一人のスカウトは顔が違ふように個性も違うのですから、対応を変えなければならないのです。そのことを大事にしていきたいと思います。ゆっくりと子どもたちに対応をしてほしい。「止まれ、見よ、聞け」です。さっき言った佇むということが大事です。一回止まってゆっくり状況を見ること。子どもと走りながらやっただめですよ。やはりきちんと止まって子どもの顔を見るということをしなれば、子どもと正対していません。止まれ、見よ、聞けということが子どもと対応する非常に大事な点ではないかと思ひます。むずかしいことをやさしくするための大事な点でもあろうと思ひます。(後略)

